

## 翻訳・校閲の共同作業から見える翻訳研究

### -HTS 日本語翻訳プロジェクト活動報告-

ピロドー イザベル<sup>1</sup>・山田 優<sup>2</sup>・大久保 友博<sup>3</sup>・

石塚 浩之<sup>4</sup>・中島 道光<sup>5</sup>・田辺 希久子<sup>6</sup>

(<sup>1</sup>愛知淑徳大学、<sup>2</sup>関西大学、<sup>3</sup>京都橘大学、

<sup>4</sup>広島修道大学、<sup>5</sup>関西外国語大学、<sup>6</sup>神戸女学院大学)

*The HTS Japanese Translation Project, funded by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies (2014-2017), organized the translation of 36 articles from the Handbook of Translation Studies for publication in the Handbook's online version. In the present report, six participants reflect on the translation and revision process adopted for the project. The case studies show how exchanges between the translator and two revisers prompted the translators to rethink their understanding of concepts, textual organization, and fluency norms, among other matters, thus not only producing better translations but also adding to their comprehension of conceptual issues in their research fields.*

#### 1. HTS 日本語翻訳プロジェクトの経緯

*Handbook of Translation Studies* (HTS) (4 volumes, 2010–2014) は、Luc van Doorslaer と Yves Gambier が4年がかりで編集した通訳・翻訳研究の百科事典である。HTSには137名の研究者が執筆した174項目が収録されており、この研究分野の現状と行方を包括的に概観することができる。書籍版の他、有料のウェブ上のバージョン HTS Online ([benjamins.com/online/hts](http://benjamins.com/online/hts))があり、オンライン版では項目相互のリンクが充実している。各項目に挙げられた参考文献も John Benjamins 社が管理するウェブ上の翻訳研究目録 *Translation Studies Bibliography* ([benjamins.com/online/tsb](http://benjamins.com/online/tsb))にリンクしている。このような機能により HTS Online は学生や研究者に役立つ研究ツールとなっている。「HTS 日本語翻訳プロジェクト」(2014–2017) では、HTS の項目を翻訳し、HTS Online において公開している。本報告は、プロジェクトメンバーによる翻訳・校閲過程の実践報告である。本節は序論として、HTS とその国際的な翻訳の取り組みを紹介し、その一部に貢献している日本通訳翻訳学会のプロジェクトの経緯を説明する。

この「翻訳の百科事典」は英語で執筆されているが、翻訳研究の思想・伝統・方法を世界中の読者に伝えるため、10カ国語への翻訳ボランティア活動が進められている。現在、アラビ

ア語、フランス語、ドイツ語、日本語、ポーランド語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、トルコ語、ウクライナ語への翻訳がインターネット上に公開されており、全世界からの協力者は 100 名以上を超えている。この翻訳ボランティアは主として大学院のワークショップとして進められており、参加者は教員の指導をうけ共同で作業している大学院生である。また項目執筆者が「自己翻訳」を行ったり、個人の研究者が翻訳したりすることもある。こうした中、日本語翻訳プロジェクトは、すでにある程度の実績を持つ研究者を中心に学会の公認プロジェクトとして翻訳が進められている点に特徴がある (Valdez and van Doorslaer, 2017)。

HTS 日本語翻訳プロジェクトは、研究者同士の気軽な会話から始まった。発端は、ビロドーが 2012 年に HTS の編集者が講師を務める CETRA (Centre for Translation Studies) のサマースクールに参加したことである。その際、HTS の編集者から、日本では大学院生に翻訳をさせてみたり、個人的に翻訳したりすることに興味がありそうな研究者はいないだろうか、と尋ねられた。直後に日本通訳翻訳学会で会った田辺と南條が関心を示し活動を始めた。その後、活動に加わった石塚と大久保が日本通訳翻訳学会に助成金を申請することを提案し、ビロドーが本プロジェクトの代表を務めることとなった。2014 年に助成金を受けメンバーを募集し、最大で 16 名の翻訳・校閲者がメンバーリストに名を連ねた。John Benjamins 社がプロジェクトメンバーに HTS への無料アクセス権を提供したことで、個人によるテキストの選択や相互参照が促進され、公開された翻訳をお互いに確認することが可能となった。また、各翻訳担当者は翻訳の著作権を John Benjamins 社に移譲する契約であるが、ほとんどの場合、その後のアクセス権を与えられた。

日本における HTS 翻訳は他の言語とは異なり、神戸女学院大学、田辺による大学院授業での共同翻訳以外は、個人による翻訳作業が多かった。しかし、各項目の翻訳を一人が担当するとしても、他のメンバー 2 名が校閲に加わるため、一つの項目の翻訳には 3 人のメンバーが携わることとなり、実際には共同的な要素を持つ翻訳過程であった。2 回校閲の体制をとることは、主に二つの目標があった。それは、まず翻訳内容の正確さや文体の統一性を確保すること、そして、研究者であるメンバー間で概念・用語・文体についての議論と知識共有を促進することである。各校閲の後には、翻訳者が校閲者のコメントを参考にしつつ修正を行い、必要な場合は校閲者と相談することになっていた。

プロジェクトの翻訳過程は以下のようにまとめられる。

1. 翻訳担当者による項目選択
2. 翻訳初稿の作成
3. 校閲担当者 1 による校閲
4. 翻訳担当者による初稿修正 (第二稿)
5. 校閲担当者 2 による校閲
6. 翻訳担当者による二稿修正 (完成稿)
7. 最終確認
8. HTS Online 担当者に送付

この過程により、翻訳担当者と校閲担当者2名の間意見交換が可能になり、文意の確認や専門用語・メタ言語の翻訳に関する問題の解決が可能となった。この校閲体制による翻訳品質の向上については、次節以降の事例報告を参照していただきたい。

プロジェクトには運営上の問題もいくつかあった。グループ内で用語統一のため、用語集の作成を試みたことがあったが、実際にメンバーが用語を追加することは少なかった。山田がウェブベースのコンピュータ支援翻訳(CAT)ツール Memsources の使用を提案し、実際に開始し、用語集の作成と共有を促進しようと試みたこともあった。しかし、メンバー間のCATの運用力にばらつきがあり、十分な使用実績を作れないまま、6ヶ月後に中止となった。その後、英語原文と完成した翻訳を共有フォルダーに集め、用語確認のため検索可能なデータベースとし活用することとし、これにはある程度の効果があった。

翻訳と校閲にかかる時間を過小に見積もることも多かった。活動開始当初は翻訳、校閲の各作業にかかる時間をそれぞれ1ヶ月と考えていたが、プロジェクト2年目にはその時間を倍にした。にもかかわらず、実際にはその計画を超えたケースが多かった。こうした問題の解決策として、メンバーがプロジェクト推進のモチベーションを刺激しあい共有するためのイベントを開催することにした。2年目には大久保が夏のワークショップを主催し、3年目には山田がこれを発展させ、「翻訳 Café」(第6節参照)という定期的な集まりを提案した。これは翻訳に関する「ふれあいの機会」を提供し、HTSの翻訳で生じる問題を議論する場であることに加え、翻訳研究の模擬授業、文芸翻訳家が主宰する翻訳ワークショップ、翻訳技術に関する議論など、様々なイベントの開催を通じてより広い翻訳の議論を進めることとした。このような集まりによって、メンバー間の直接交流の機会も得られた意義は大きい。関西で開催される「翻訳カフェ」は、本プロジェクトの終了後も、翻訳に関するアイデアの交換場として発展が期待できる。

本プロジェクトは、3年間、日本通訳翻訳学会の支援を受けてきたが、2017年にはプロジェクトの区切りを迎えることになった。この機会にこれまでの活動記録を冊子にまとめ、日本通訳翻訳学会員に配布することにした。ここでは、メンバーが翻訳した36項目を、「全体像」、「実践領域」、「研究の諸相」、「翻訳と社会」の四つのテーマに整理し紹介する。これは、校閲を翻訳実践についての再考の機会とし、翻訳理論とその日本語におけるメタ言語に関する検討を行った成果である。

以上、第1節は、当プロジェクトの代表を務めたピロドーが担当した。ここからは本プロジェクトに関わったメンバーがそれぞれの手がけた原稿から4件の事例を報告する。執筆は、第2節を山田、第3節を大久保、第4節を石塚、そして第5節は神戸女学院の翻訳チームから中島、田辺がそれぞれ担当する。さらに第6節では、本プロジェクトから発した活動の広がりを紹介し、第7節で全体をまとめる。尚、本稿は日本通訳翻訳学会関西支部第44回例会(2017年3月11日)での発表に基づき、加筆したものである。

## 2. HTSの翻訳は誰のためのものなのか？

### 2.1. はじめに

本節では、筆者がプロジェクトの初期に翻訳を担当した「コンピュータ支援翻訳

(Computer-aided translation (CAT))」を事例に、作業工程で他のメンバーから得たフィードバックを通して翻訳者として考えたことをまとめる。本プロジェクトのメンバーが考える「スコ-pos」や「翻訳規範」(の違い)を検討しながら、「入門書の翻訳は誰ものためのものなのか？」という問いを再考する。

## 2.2. 作業の実施状況

### 翻訳と校正(始まりの時期)

作業期間は2014年5～10月。本プロジェクトが開始して間もない頃で、チームとしても作業方針や進め方などを模索していた時期であった。この段階で決定されていた方針は、以下の事項のみである (HTS Style Guide より)。これ以外にも技術的な体裁に関する取決めがあったが、スコ-posとして機能し得る翻訳の方針に関係する事柄はこれだけであった。

- 訳文は、知識伝達・教育のための読みやすい文章・用語にすること。
- 原典の各項目執筆者でスタイルが違うように、訳者もそれぞれのスタイルが尊重される。
- 各訳者名は、項目ごとに掲示される。
- 用語については既訳のある場合も、まだ学会において流動的である点も考慮して、柔軟に対応すること。引き継ぐ場合は訳語の参照元を提示、別の訳を当てるときは相談することが望ましい。

とは言え、この程度の決め事しかないからといって翻訳ができない、と言う訳でもないだろう。個人で翻訳を行うのであれば、十分であると思う。しかし、本プロジェクトのように複数のメンバーが校正に関与する共同作業となると少し話が違ってくる。

本プロジェクトの取組みには、翻訳通訳学の教育的参考書を「翻訳」するというメタ的作業が含まれるので、対象読者となると大学院生への配慮をどの程度優先するのかにより、原文への忠実度が変わってくると筆者は考えた。というのも、ポエヒハッカー著の『通訳学入門』およびマンデイ著『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳、みすゞ書房)の翻訳作業に筆者は関わったが、この時は、トランスレーションスタディーズという分野の入門書を初めて日本語に翻訳するということもあり、まずは原文に忠実に翻訳するという方針で行った。ここでいう「忠実」とは、日本(のアカデミアや翻訳事情)という文脈にローカライズしたりすることを避ける、つまり意識や書き足しをしないと意味である。『通訳学入門』を翻訳するからには、学生向けの解説書として成立させるため、日本の事情に適合した書き換えや補足が必須であると認識しながらも、当時の方針はその優先順位を下げていた。

しかし、一連の『入門』が出版されたのち、類似書が相次いで出版されると、この問題は解消されることになる。例えば、藤濤文子監訳の『翻訳研究のキーワード』(研究社)には、原書の翻訳に加え、各項目に訳者らが書き下ろした解説が加えられ、『よくわかる翻訳通訳学』(ミネルヴァ書房)では、国内の学部生向けに照準を合わせて、すべての項目を担当者が一から執筆した入門書になった。つまり、当初の入門書の翻訳で成し得なかった目標、すなわち日

本の事情に適合させるための加筆が達成されたのである。

このようなタイミングで発足した本プロジェクトは、もう少しその意義を慎重に吟味してもよかったかもしれないと後になって思う。HTS は、掲載されている見出しが多く、網羅的なので、大学院生や研究者が新たな分野や項目を概観する際は、非常に重宝する資料であることは疑われない。他方で、英語系の専門領域で大学院生に読ませるのが目的であれば、原書を読むことも大学院生には求められるはずである。つまり、HTS を日本語に翻訳する事の価値とは何か、それを吟味しておくことは大切であった。しかし、この議論が事前に十分になされていなかった事が、後述する校正段階でジレンマの原因の1つであったと考えられる。少なくとも、筆者はそう考えている。

### 2.3. 初校と2校のコメントと修正の抜粋

では、実際に、「コンピュータ支援翻訳」の項目の冒頭一部を例に議論を進める。まず、下記に原文と訳文を記す。

#### 【原文】

Computer-aided translation (CAT) is the use of computer software to assist a human translator in the translation process. The term applies to translation that remains primarily the responsibility of a person, but involves software that can facilitate certain aspects of it. This contrasts with machine translation (MT), which refers to translation that is carried out principally by computer but may involve some human intervention, such as pre- or post-editing. Indeed, it is helpful to conceive of CAT as part of a continuum of translation possibilities, where various degrees of machine or human assistance are possible.

#### 【最終稿】

コンピュータ支援翻訳 (computer-aided translation = CAT) とは、人間の翻訳者の訳出プロセスを支援するためにコンピュータソフトウェアを使うことである。CAT という言葉は、翻訳作業の責任が主として人間にあるとしつつも、その翻訳作業の一部をソフトウェアが担い得るということを意味している。このことは機械翻訳 (machine translation = MT) とは対照的で、コンピュータに主な翻訳作業を行わせながらも、プリエディットやポストエディットといった人の手の介入が部分的に必要な。となると CAT というのは、翻訳のなかで機械と人間、それぞれの手がどれくらい加わるかという度合いが違うだけで、様々なありうるその配分のひとつと考えればわかりやすいのかもしれない。

上は最終稿の翻訳である。紙面の制約上、議論の焦点を冒頭の段落の最後の文(下線部)に絞る。原文の a continuum of translation possibilities, where... に対応する訳文に着目する。この箇所の訳は初校では下のようになっていた(筆者訳)。

#### 【初校訳】

すなわち、CAT とは、機械と人手支援がさまざまな度合で関わる翻訳の可能性における連続的変化のひとつと捉えるのがよいかもしれない。

これに関して、校正者からは次の指摘をもらった。

【コメント】

わからないでもないけれど、でもやっぱり普通はわからないというか、余計にわからなくなっている感が。「となると CAT というのは、翻訳のなかで機械と人間、それぞれの手がどれくらい加わるかという度合いが違うだけで、様々にありうるその配分のひとつと考えればわかりやすいのかもしれない。」——一般書だと、これくらいは崩すかも。まあ第一段落なので、ある程度わかりやすくしてしまっていると思う。

校正者によるこの指摘は非常に妥当だ。初校訳の中で特にお粗末なのは a continuum of translation possibilities の部分であることは、翻訳をした筆者も気づいていた。Continuum という語は訳しづらい。「翻訳の可能性における連続的変化」とやったのでは、意味がわかりづらいのは尤もだ。

#### 2.4. 問題提起

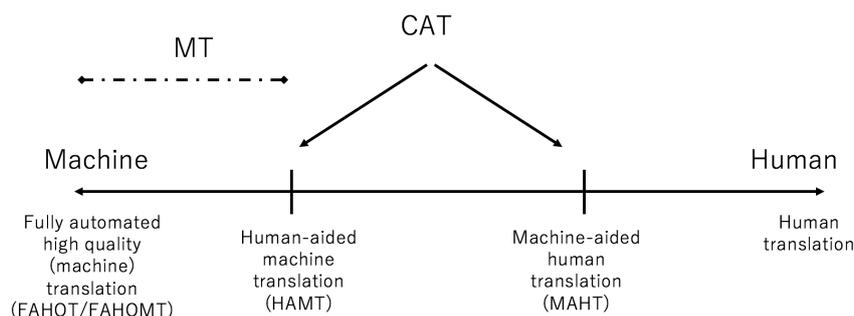
何故、このような訳にしてしまったのか。言うまでもなく筆者の翻訳スキルの未熟さが原因のひとつとして挙げられる。根本的な(日本語による)文章力の無さに起因するとするのであれば、それに尽きるかもしれない。それを自覚しながら、訳文を十分に練っていない怠慢な態度も反省すべきであろう。

外的要因を求めるのであれば、原文の内容をどの程度噛み砕いて表現したらよいか、というジレンマに直面し、悩んでいたのも事実である。この翻訳を行う前に、他の数名のメンバーの訳出物の校閲を行った。校閲作業を通してメンバーが考える「規範」や「訳出志向」が、筆者が考えていたそれよりも「直訳調」であると感じた。上述したように、一連の翻訳の入門書が出版されたタイミングで HTS プロジェクトが発足したことから、その方針の1つが示す「教育のための読みやすい文章」の意味を、筆者は、かなり明示的に噛み砕いた訳文にすることと解釈していたのだと思う。しかし、他のメンバー訳を見ながら、その齟齬に気づき、自分で訳す際には、より直訳調・原文忠実な方向へと方略を変更していたのだ。

#### 2.5. 議論

原文の意図するところ

実際にこの文脈において、下線部の「Continuum 連続的変化」が意味することは何か。筆者がこれを読んで咄嗟に思い出したのは Hutchins and Somers (1992)の有名な下図である。下記において CAT(コンピュータ支援翻訳)が示す範囲は、機械とのインターアクションと人間翻訳者の介入の変化である。これが Continuum であることは、分かっていたつもりだったが、上手く訳せていない(訳していない)という、翻訳作業の基本的な問題に直面したのであった。



Hutchins and Somers (1992)

図1 翻訳テクノロジーの進化図 (Hutchins and Somers, 1992)

噛み砕くのか、噛み砕かないのか、それが問題なのだ。学術書の翻訳の経験が豊富であれば、「まあ第一段落なので、ある程度わかりやすくしてしまってもいいと思う」という校正者の指摘の判断を行えたかもしれない。実は判断は、「教育のための読みやすい文章」に対する筆者の最初の解釈とも合致していた。しかし「原文重視型」でやろうとするあまり、上手くやれなかった気もした。翻訳をしていると頻繁にある問題でもあるのだが...

## 2.6. まとめと反省

「入門書の翻訳は誰のためのものなのか？」翻訳という作業は、翻訳する者に常に学びを与えてくれる。翻訳者自身が、翻訳作業を通して一番学習できる。本プロジェクトメンバーの構成は研究初心者が中心であった。その意味でも、この入門書の翻訳は、メンバーのためのものであったともいえる。そして、我々と同じように研究者を志す者のために翻訳をしたのである。

## 3. 研究者間における協同翻訳の意義

専門的な知識に基づいて執筆された項目を訳すためには、もちろん訳者自身が専門家であれば難しい。他国のHTS翻訳プロジェクトでは大学院生が多数関わり、翻訳それ自体が専門分野の学習になっている例があるが、日本語版のプロジェクトでも同様の例では、校正校閲過程でかなりの修正が必要とされた。エラーは多岐にわたり、単純に文意をくみ取れていないものから、訳者の知識・調査不足がみとめられるものもあった。

とはいえ、その項目に関係する研究の専門家であっても、翻訳がうまく行かないことがある。知っているはずの知識がまだ日本国内での研究に根付いていない、あるいは概念をじゅうぶんに母国語化できていない場合が、そのひとつに当たる。専門家本人が理解していても、他の専門家との情報交換に用いる言葉がまだこなれておらず、そのため相互理解が困難になっているというわけだ。その意味では、研究者自身もその人物の属する言語環境における研究の進展度合い、言い換えれば言語文化内における研究分野そのものの定着性に、翻訳行為そのものが左右されるのかもしれない。

たとえばHTS項目のひとつ「パラテキスト」も、このような事例であろう。冒頭部をその一例とし

て掲げよう。

The analysis of verbal and visual material surrounding and presenting published translations is increasingly becoming integrated into empirical research on translated texts. These materials which lie at the threshold of translations are referred to as ‘paratexts’, a term initially conceived to cover presentational elements of works in the literary field, including, but not limited to, translations. Typical examples of paratexts include titles and subtitles, pseudonyms, forewords, dedications, epigraphs, prefaces, intertitles, notes, epilogues, and afterwords (Macksey 1997: xviii) which all constitute devices and conventions, both within a book and outside it, which mediate the work to the reader.

上記の文章は、当該項目の訳者による初稿では以下の通りだった。

出版翻訳の周辺や現場にある言語・視覚資料の分析は、訳出テキストについての実証研究へとといよいよまとめられるようになりつつある。翻訳の敷居部分に位置するこれらの資料は〈パラテキスト paratext〉と呼ばれるもので、翻訳に限らず、翻訳を含む文芸分野の作品の現場を形作る諸要素を取り扱うために当初用いられていた語だ。パラテキストの典型例としては、題名・副題・筆名・前書き・献辞・題辞・序文・章題・注・跋文・後書きといったものがあり(Macksey 1997)、いずれも書籍内外のからくりや慣例を構成し、作品を読者へと取り次ぐものである。

一見、訳文はこなれているように思えるが、実のところは日本語に寄せすぎており、専門家である訳者の解釈・理解に踏み込んだもの、ないしはその説明になっている。最初の校閲は、起点言語を母国語同様に運用できる人物(ただし内容については専門ではない)によるものだったが、その際にチェックが入ったのは、まさにそうした専門家としての解釈の部分である。“material presenting published translations”(出版翻訳の現場にある資料)や“presentational elements”(現場を形作る諸要素)という語句を初めとして、同じく「現場」を含む訳語が用いられた“presenting”, “presented”などにもハイライトが入れられ、とりわけ「他動詞性」があるのかというニュアンスの正確性が問われたのである。専門家たる訳者としては、「パラテキスト」が「現場」の状況や環境をよく示しうるものだという理解があって、説明的な意識をしているわけだが、同じ研究者であっても理解や語彙を共有していない者にはもちろん明瞭には通じない。

初校段階では、訳者もその問題に気づいておらず、おおまかな内容は伝わるものとしてそのまま訳文を保留するが、2校でも同様の指摘が今度は通訳研究を専門とする者からもたらされた——「やはり「現場」のみでは意味が広すぎて、具体的な場面を喚起しづらい。少し補足説明をつけては？」——こうした研究者同士のディスコミュニケーションがきっかけとなって、訳者は訳語を再考することとなる。

そこでこの項目の訳者があらためて考慮したのが、既存の専門用語の再利用であった。「パラテキスト」というカタカナ語で表されるものが、出版に一般的な行為であるのなら、やはり日本にも具体的な用語がその周辺にあるはずではないか。語感や意味のずれが少なく定着した語彙を用いることで、非伝達の問題を解消しようとしたのである。そこで選び出されたのが「刊記(する)」と「付き物」という言葉だった。「刊記」とは出版印刷において「出版の時・場所・刊行者などを記した部分、または出版の際にそれを記す行為」のことをいい、「付き物」は「書籍や雑誌の本文以外の扉・口絵などの付属印刷物を総称する言葉で、書籍では口絵・序文・はしがき・目次・凡例なども含む」語である。「刊記する」「付く」にある述語としてのニュアンスが活用できうると考えたわけだ。このような語彙上の考察を経て、最終稿は次のようになった。

翻訳出版に付随して刊記される言語・視覚資料の分析は、いよいよ訳出テキストについての実証研究へとまとめられるようになりつつある。翻訳の敷居部分に位置するこれらの資料が〈パラテキスト paratext〉と呼ばれるもので、この語は翻訳に限らず、翻訳を含む文芸分野の作品の付き物類を取り扱うために当初用いられていた。パラテキストの典型例としては、題名・副題・筆名・前書き・献辞・題辞・序文・章題・注・跋文・後書きといったものがあり(Macksey 1997)、いずれも書籍内外の仕組みや慣例を構成し、作品を読者へと取り次ぐものである。(変更部分に下線)

この項目に取り組まれたのはプロジェクト初期のことであり、訳文制作や複数人校閲も手探り状態で行われたが、研究者同士による校閲は、こうした「知っていても訳せない」という状況、ないし「理解とは別の問題として訳語を知らない(見つけられない)」という現実を露わにさせる。それゆえ、ある研究分野に概念や用語を流通・流布させるにあたって、訳文の制作段階で専門家たちによる訳語・訳文の議論が行われることは、研究の発展にとっても大いに有意義なことであるはずだ。ハンドブックや百科事典の共同翻訳作業を通じて、そこにある概念は明確化され、通約可能なものとなる。逆に言えば、適切な分野の専門家と隣接分野の研究者が対話しない翻訳行為は、利用に耐えない訳語と訳文の羅列を生むことにもなりかねない(し、事実そうした訳文を通訳翻訳研究は生んでしまっている)。むろん、入念に作られた批判にも耐える翻訳を、研究者自身も積極的に参照していく行為が付随しなければ、せつかくの訳業も無駄になる。翻訳現場での双方向性を高めるとともに、分野全体での相互参照を推進させることを今後の課題とすべきだろう。

#### 4. 校閲の表層的ゆらぎ

翻訳は翻訳者による原文の読みの反映である。翻訳の校閲において、校閲者は翻訳者の読みをさらに読む。研究者同士で翻訳と校閲を担当する場合、校閲作業は単なるエラー点検ではない。実際の翻訳と校閲の作業を通じ、相手の規範と方略を探りあい、お互いに理論的立場を再検討する。以下では、翻訳者の立場から、校閲者が異なる二つの立場を同時に使用しているように見える例を取り上げる。

#### 4.1 翻訳と校閲の例

以下は Robin Setton による Conference interpreting (「会議通訳」) という項目の第 2 節 (Professional norms, standards, and conventions「職業規範・基準・慣習」) の冒頭付近の一節の原文と筆者 (石塚) による翻訳初稿である。なお、議論の便宜上、原文のこの個所を五つに分割し、[1] から [5] の番号を施し、翻訳にも同様の番号で原文と訳文の要素間でのおよその対応関係を示す。

[1] Interpreters are physically separated from the meeting in booths, [2] and do not usually intervene to provide cultural explanations, adjust language register, or even to ask for clarification, [3] although some studies of interpreters' roles have highlighted exceptions to this pattern (e.g., Diriker 2004). [4] Typically, however, expectations focus on speed and accuracy, even in consecutive, and procedure is relatively standardised, [5] with little scope or call for explanation or advocacy.

##### 翻訳初稿

[1] 通訳者はブースに配置され、会議の場からは物理的に切り離されている。[3] 通訳者の役割についての研究 (e.g., Diriker 2004) によると、通訳者が文化について説明したり、言葉づかいの丁寧さを調整したり、相手の発言の主旨について確認を求めたりすることが、例外的とはいえありうると強調されているが、[2] ふつうはそういうことはしない。[4] 典型的には、逐次通訳の場合ですら、速度と正確さに期待の焦点が当てられ、手続きは相対的に標準化されており、[5] 説明や意見表明の余地や要求はほとんどない。

この翻訳初稿に対する校閲結果は以下の通りである。校閲は MS Word の変更履歴の記録を使用して行われた。本稿では、その作業状態を再現するため、校閲者による削除を取消し線、追加を下線で示す。

##### 第 1 校

[1] 通訳者はブースに配置され、会議の場からは物理的に切り離されている。[2] そのため、通訳者の役割についての研究 (e.g., Diriker 2004) によると、通訳者が文化について説明したり、言葉づかいの丁寧さ(言語使用域)を調整したり、相手の発言の主旨について確認を求めたりすることが、例外的とはいえありうると強調されているが、ふつうはそういうことはしない。 [3] むしろ、通訳者の役割についての研究 (e.g., Diriker 2004) は、そのような事が例外的とはいえありうると強調しているようである。 [4] しかし典型的には、逐次通訳の場合ですら、速度と正確さに対する期待の焦点が当てられ合わせられ、その手続きは相対的にほぼ標準化されており [5] 説明や意見表明の余地や要求はほとんどない。

この一節からだけでも、校閲者が丁寧な作業を行っており、翻訳初稿を尊重しつつ、かなりの修正を提案していることがうかがえる。加えて[5]に関しては「この部分の解釈が不明瞭」というコメントを与えている。校閲者からの指摘はいくつかのタイプに分けられる。たとえば、第1校には初稿にはない接続詞（[2]「そのため」、[3]「むろん」、[4]「しかし」）が追加されているし、より原文に忠実な訳語の追加（[2]「言語使用域」）、コロケーションの調整（[4]「合わせ」）なども見られる。本稿では、訳出順序と解釈の追加の2点に絞って、この一節の翻訳と校閲に関する論点を整理する。

#### 4.2 訳出順序

原文では[2]の「通訳者による介入行為の否定」に続き[3]の「役割研究における例外の強調」を述べている。一方、翻訳初稿ではこの順序が逆転している。校閲者からは原文の順序を保持すべしという提案があった。情報の順序もテキストの意味の一部であるという考え方がある。テキストの情報は旧情報から新情報へという順序を取り、新情報こそが主意であるとすれば、情報順序の逆転は原文の意味をゆがめることにつながる。この立場に立てば、原文の情報順序は可能な限り保持するほうが忠実な翻訳となる。

確かに訳出順序がテキストの意味として重要な意味を持つ場合もある。しかし、あるメッセージを伝達するための表現はひとつではない。原著者は常に伝達内容を表現するために最適な記号列の配列を選択しているとは限らない。より効率的な伝達方法があるなら、翻訳者がそれを採用する自由を認める立場もあるだろう。一方、翻訳者によるこのような自由の行使も一種の介入として退ける立場もありえる。この例の場合、原著者である Setton の議論は「介入の否定」、「例外の強調」に続き、逆接を経て結局は「介入の否定」に落ち着く。つまり、この一節を全体で見れば、「例外の主張はあるものの介入の余地は小さい」というのが主旨であり、[2]と[3]の順序を保持することにどれほどの意義があるかは議論の分かれるところであろう。

#### 4.3 解釈の追加

翻訳初稿は[5] *with little scope of call for explanation or advocacy* を「説明や意見表明の余地や要求はほとんどない」と訳出したところ、校閲者から「解釈が不明瞭」との指摘があった。確かにこの訳文には、「誰」が「何」について「説明」や「意見表明」をするのか、「誰」が「誰」に対し「要求」を行うのが明示的でない。こうした要素のすべてではないにしても、いくつかを具体的に示すことにより、訳文はより「わかりやすい」ものになるであろう。

とはいえ、翻訳初稿のこの部分に見られる（非）明示性は原文にも共通であり、これが原因でこの初稿がわかりにくいものであるとすれば、それは原文にも同じことが言える。原文に非明示的な情報を明示化することを介入と捉える立場もあり得る。

#### 4.4 暫定的解決

校閲者の指摘を踏まえ、改稿した原稿を第二校閲者に送り、同様の作業をもう一巡した。第二校閲者からの指摘はそれほど多くなかった。最終稿は以下の通りである。

#### 完成稿

[1] 通訳者はブースに配置され、会議の場からは物理的に切り離されている。[2] そのため、通訳者が文化について説明したり、言語使用域（言葉づかひの丁寧さなど）を調整したり、相手の発言の主旨について確認を求めたりするような介入はしない。[3] 通訳者の役割についての研究（e.g., Diriker 2004）は、例外もあり得ると強調している。[4] とはいえ、一般的に、逐次通訳の場合ですら、主な期待は速度と正確さに集中しており、その手順はほぼ標準化されているため、[5] 通訳者による補足説明や発言者に対する弁護の機会は限られており、そうしたことが求められることもほとんどない。

[5]では第一校閲者からの指摘を受け、原文では非明示的であった情報のいくつかを明示化した。本プロジェクトにおいては、校閲者の指摘は提案という位置づけであり、最終的にその提案を受け入れるかどうかは翻訳者の判断としていたが、基本的には校閲者の判断をできるだけ尊重する立場で原稿を修正する翻訳者が多かった。個人的にはこのくらいわかりやすい訳をつけることには異存はない。ただし、本プロジェクトのメンバーの中には筆者の翻訳・校閲について介入過多と評価する者もいた。本稿で取り上げた例についての評価ではないが、このことは付記しておく。

#### 4.5 考察

本節の例から、訳出順序と解釈の追加に関する二つの指摘とそれらに対する対応を見た。この例を取り上げた理由は、原文への忠実性という観点から見れば、この二つの指摘が正反対の立場を示していることに気づいたためである。情報順序の保持は原文への形式的等価に通じるが、解釈の追加はここからの逸脱を唆す。この校閲者は矛盾する観点から一貫性のない作業を行っていたのだろうか。上のような分析からはそのような結論も導けなくはない。しかし、実際にこの翻訳原稿の校閲作業をすべて確認すれば、校閲者は決して気まぐれな作業を行っていたわけではなく、何らかの立場から翻訳の質に貢献しようとしていることは理解できるのである。校閲者は作業に際し、なんらかの一貫した姿勢を保持していたはずであり、だとすれば、この一貫性は原文への忠実性以外の観点から説明されねばならない。これを説明することが可能な理論は従来の翻訳研究でもないわけではない。現在の視点からこの問題を再検討することもできる。本稿ではこの課題には立ち入らず、この例を記録として報告し、今後の研究のために問題を提起するのみにとどめるが、本プロジェクトの地道な活動からこのような問題意識を得ることができた。こうした気づきから新たな研究の視座を得られたことこそ、このプロジェクトの重要な収穫である。

#### 5. 翻訳学習者のプロジェクト参加報告

この節では HTS (*Handbook of Translation Studies*) の多国語翻訳プロジェクトの一環で本プロジェクトに参加した翻訳学習者の経験を、インタビューやアンケートをもとに報告する。本プロジェクトに参加した唯一の翻訳学習者たちであり、その経験は報告に値すると考える。そこ

には通常の学習者による翻訳プロジェクトにありがちな問題だけでなく、本プロジェクトならではの経験を垣間見ることもできた。

### 5.1. 対象テキスト・実施時期・参加者プロフィール・訳出プロセス

本報告の対象となるのは、神戸女学院大学において翻訳学習者が本プロジェクトに参加して行ったグループ翻訳活動である。対象テキストは HTS の収録項目4本、参加者は大学院修士課程通訳・翻訳コースの院生、および数名の聴講生で、その概要と訳出プロセスは以下のとおりである。

項目名 Polysystem: 2012年11月～2013年1月、参加者8名

項目名 Translation Process: 2013年4月～5月、参加者8名

項目名 Subtitling: 2013年10月、参加者5名

項目名 Translation Studies: 2014年4月～7月、参加者6名

#### <訳出プロセス>

1. 分担とスケジュールの決定
2. 背景調査(翻訳担当者が行う)
3. 用語集作成(訳出と並行して担当者がそのつど蓄積し、次の担当者に引き継ぐ)
4. ドラフト訳(担当者が作成してレビュアーと教員に送付)
5. ピアレビュー(レビュアーがコメントをつけて担当者に送る)
6. 修正版作成(コメントをもとに担当者が修正。修正版を参加者全員に配布)
7. 参加者全員による修正版の検討・議論(授業の場で)
8. ディスカッションをもとに担当者が最終版を作成
9. 最終版を本プロジェクトのルールに基づき、プロのリバイザー2名が校閲。指摘を受けて学習者たちが修正後<sup>2</sup>、完成版をオンライン版 HTS に掲載。

### 5.2. 受講生の感想

以下は、授業後に座談会形式で履修生・聴講生に聞き取りを行ったり、アンケートを実施したりして得た声をもとに作成した資料に基づく報告である。この資料は 2013年11月28～30日、オランダのユトレヒトで開催された学会 International Low Countries Conference on ‘Transferring Translation Studies’ のために中島が作成した。この学会には HTS 翻訳に取り組む各言語の代表が集まり、それぞれの状況を発表するパネル・ディスカッションが行われた。著者らはそこで日本における HTS 翻訳プロジェクト全般の進捗状況や、著者らが参加している大学院生によるグループ翻訳について発表する予定だったが、直前になってテーマが変更になったため、当該資料を使うことはなかった(パネルでは日本の全般的状況についてのみ報告<sup>1</sup>)。以下ではその資料に基づき、グループ翻訳で学生はどんな経験をしたかを学生目線で明らかにし、今後の同様の取り組みの参考に供したいと考える。

### 5.2.1 全般的な感想(プロジェクト参加の意義)

本プロジェクトへの参加について、学習者たちは以下のような意義を感じていたようだ。

- 翻訳力を養えたこと:背景知識の構築、用語管理法の習得、翻訳スタイルの構築、英語から日本語に移し替えるときに固有の問題点への気づき等。
- 高いモチベーションで取り組めたこと:翻訳理論への理解を深めるのに役立つ。公共性の高いサイト(HTS online)に作品を残すことができる。
- プロの品質を知ることができたこと:プロのリバイザーのチェックを受けることができる。

※学生のコメント例:「よい経験になった／内容の濃いアカデミックな項目の翻訳ができた／翻訳理論に触れることができた／未知のことを学ぶことができた／他者の訳稿を議論することができた／背景知識の重要性を痛感した」

### 5.2.2 内容に関する感想

4本の項目のうち、“Polysystem”の項目は特に内容が難解だった。学習者の知識が乏しく、原文の言わんとするところが想像さえできない部分があった。内容の濃いアカデミックな項目の翻訳にトライし、翻訳理論やこれまでに知らなかったことに触れられたのはよい経験だったというのが参加者の共通の感想だったが、知識がなければ訳せないことを示す良い例といえるだろう。

※学生のコメント例「なめらかで自然な訳文を作ることが難しかった／適切な参考資料を見つけることができなかった／授業でディスカッションしても、解決できなかった」

一方、“Subtitling”の項目は身近な内容であり、訳出を楽しんだという声が目立った。字幕そのものに日常的に親しんでいるので、原文の表していることがよく理解できたことに加えて、参考にできる資料も豊富に見つけることができたという。

※学生のコメント:「テレビや映画で日常的に字幕に慣れ親しんでいる／参考資料を豊富に見つけることができた／原文の内容がほぼ完全に理解できた／原文の内容に興味を持った／なめらかで自然な訳文を作ることができた／翻訳することが楽しいと感じられた」

### 5.2.3 参加者全員でのディスカッションの論点

上述のとおり、この取り組みでは各回の翻訳担当者が修正担当者の点検を受けて作成した修正版をめぐって、授業内で全員参加の議論を行った。このディスカッションの記録によれば、主な論点は以下のようなものだった。

- 表記の問題(イタリックや原綴の表記、中黒や句読法など)

- 専門用語をカタカナ語のまま訳出するか、日本語訳するか
- 日本語の訳語の選択(例えば同義語の中で何を選ぶか)
- 日本語の適切性(能動態か受動態か、助詞の使い方など)
- 専門用語・学術用語の適切性
- 英文読解(構文解析など)
- 訳出スキル(英語の順番通りか逆送りか)

特に困ったのが専門用語や学術用語が適切に訳せているのかということだった。HTS の場合、他の項目にも共通する用語があるはずなので、他の項目ともグロサリーを共有できれば大きな助けになるという意見が、3 本目の項目を終えた段階で多数出された。現在では翻訳授業に「みんなの翻訳」などの翻訳支援システムが活用されるようになり、用語管理の問題はかなり解消されている。またピアの訳への指摘に躊躇いがあること、分担するためテキスト全体の文脈を見失いがちであることなど、グループ翻訳全般に言える問題点もあった。

#### 5.2.4 プロ翻訳者のリバイザーからのコメントに対する感想(“Polysystem” の場合)

本稿では校閲者のコメントやそれに対する修正などを具体的に紹介することはせず、学習者が主にどのような問題を指摘されたかを紹介するにとどめる。

- よく考えずにカタカナ表記をしている
- 読解上のエラーがある
- 不適切な言葉選びが見受けられる
- 不自然でぎこちない日本語になっていたり、軽率な訳し方をしているところがある
- 辞書通りの言葉を使いすぎている
- 句読法上の誤りが見受けられる

これらに対する学習者の感想として、多大な労力を払って校閲してくださったことを貴重なことと思ひ、感謝すると同時に、指摘されるだけでは修正がうまくできなかったことが挙げられた。自分たちでも適切な訳でないことはわかっているので、こう訳してはどうかという代替案を、鍵となる部分だけでも提示してもらえれば、それを参考にしながら自分たちの訳稿を磨いて完成へと進めることができ、さらに勉強になったのではないかとのことだった。

#### 5.3. 結び

本稿で紹介した学習者の経験の多く(背景知識、言語ペアに特有の翻訳スキル、用語管理、グループマネジメントなどでぶつかる問題)は、教育的な翻訳プロジェクトにおける学習者の経験に共通して見られるものであろう。これに対して、本プロジェクトに固有の経験もあった。特にプロのリバイザーによる指摘は、授業という限られた場では得られない、社会に通用する翻訳を学ぶ貴重な機会となった。実際、「よくできた」という感想のあった項目でも、プロの校閲者の

目から見ると、品質基準をはるかに満たしていないと判定されていた。同時に、プロと学習者が校閲を通してやり取りする場合の問題点(どこまで直すか、どのように指摘するか)も浮き彫りになった。この点については、学習者の側から「代替案を提示してほしい」との感想があった反面、他の項目でプロがヒントや案を出しても、無批判に従うだけで考察が深まらないとの報告もあった。また学習者の初稿と校閲者が推敲した最終稿を、学習者自身が自主的に見比べる形式が有益だったとの報告も、プロジェクトのその後の展開においてあったことを付け加えておく。さらに、原文が翻訳研究という学習者の関連分野だったことの意義も、翻訳教育において「そもそも何を訳すのか」という問題を考える上での参考になるだろう。

今後の課題としては、当時より格段に進んだ翻訳テクノロジー(用語管理システムや、校閲カテゴリを始めとする校閲システムなど)の導入、協働学習等の枠組みを用いたグループ翻訳マネジメントシステムの導入、「翻訳教育において何を訳すのか」にも関係する、トランスレーション・ブリーフ(訳出の目的・読者対象・品質基準などの定義システム)の導入などが考えられる。

## 6. 活動の広がり

HTS 訳出のために行われた4年間のグループワーク活動は、濃密なやりとりとなったため、さらなる発展や派生をも生じさせた。プロジェクトに人が集まるなかで、互いに交流が生まれ、さまざまな企画が続いていくこととなった。

最も素朴かつ初期のものが、自主勉強会である。当初の参加者に関西圏在住の者が多かったため、直接顔をつきあわせて疑問点の相談ができたことは、幸いにもプロジェクト初期の円滑な運営にもつながっている。ただしプロジェクトが広がって参加者の活動地が多様になったあとでは、Skype などを通じた遠隔ミーティングや学習会なども工夫して行われ、絶えずグループワークとしての結束を強めることができた。



図2 翻訳 Café の活動風景  
(2016年7月24日 京都)

その勉強会・学習会がさらに発展して、現在では「翻訳 Café」(正式名: Translation, Culture and Academic Forum for Educators; URL: [translationcafe.chillout.jp](http://translationcafe.chillout.jp))と題した活動が実践されている。趣旨としては、関西圏にゆかりのある大学研究者・大学院生を中心に、複数の学会の会合を横断的に開催できる場、ないし実務家や翻訳家が交流できるイベントを提供するものとして構想された。2016年5月14日に始まったこの集まりは、中心メンバーのみの限定会合と、広く参加者を募る一般会合の2種を組み合わせながら、これまでも4回開催されている。

限定会合では情報交換が重視され、このプロジェクトの自主勉強会のほか、同じ翻訳研究に携わる大学人の教育手法・講義内容などの紹介・議論が行われた。一般会合では、講師を招いた上で翻訳教室を開いた会があり、また機械翻訳・言語処理技術についての発表および

パネル・ディスカッションを共同主催したこともあった。こうした翻訳 Café の活動は、本プロジェクトの終了後も継続する予定である。

ほかにも、本プロジェクトのメンバーが主体となって、二言語並行コーパスの構築プロジェクトも始められ、2016年度の基盤研究B「記者会見通訳の二言語並行コーパスの構築と応用研究」や2017年3月の言語処理学会第23回年次大会での発表にもつながっている。

## 7. まとめ

本稿では、2014年度から3年間にわたり日本通訳翻訳学会の公認プロジェクトとして活動したHTS日本語翻訳プロジェクトの概要を紹介し、四件の事例を報告した。2017年までに完成した原稿は冊子にまとめ活動記録とするが、公認期間終了後も、HTS日本語翻訳は継続する予定であり、現在も数項目の翻訳が進行中である。

今や、通訳翻訳研究は、途方もなく広い研究テーマを含んでおり、一人の研究者が最新動向のすべてを俯瞰することは困難となっている。本プロジェクトでは、基本的に翻訳担当者は自らの研究上の関心のもとに翻訳項目を選択したが、校閲の場合は、全く専門外の項目を担当せねばならない場合も多々あった。とはいえ、メンバーはそれぞれ通訳翻訳についての一言をもつものばかりである。それぞれが項目を翻訳し、校閲しあうことにより、お互いの翻訳観を突き合わせる作業には議論を超えた意義があった。この交流からは、すでに新たな共同研究、個人研究の動きがいくつか生まれている。ここから生まれた新たな活動やその研究成果が通訳翻訳研究全体の活性化への一助となれば幸いである。

### 【著者紹介】 \*執筆順

イザベル・ビロドー (BILODEAU Isabelle) 愛知淑徳大学准教授。主に翻訳者の執筆活動(あとがき)を研究している。連絡先: bili@asu.aasa.ac.jp

大久保友博 (OKUBO Tomohiro) 京都橋大学助教。翻訳論・翻訳史。連絡先: okubo-t@tachibana-u.ac.jp

山田優 (YAMADA Masaru) 関西大学 外国語学部・外国語教育学研究科教授。研究の関心は、翻訳プロセス研究 (TPR)、翻訳テクノロジー論 (CAT)、翻訳教育論 (TILT) など。連絡先: yamada@apple-eye.com

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 広島修道大学准教授。主たる関心は通訳翻訳の認知プロセス。連絡先: hishizuk@shudo-u.ac.jp

中島道光 (NAKASHIMA Michiko) 関西外国語大学非常勤講師。神戸女学院大学大学院文学研究科通訳・翻訳コース在学中に当プロジェクトに参加。連絡先: giraffe0409@white.plala.or.jp

田辺希久子 (TANABE Kikuko) 神戸女学院大学元教授。神戸女学院大学大学院における本プロジェクトの実施責任者。連絡先: kikukotanabe@gmail.com

### 【註】

1. 発表では日本通訳翻訳学会のHTSプロジェクトの進行状況について報告し、特に進行表について他の発表者や聴衆から高い評価を得た。

2. プロのリバイザーからの指摘への対応は、学習者が卒業するなどの事情から教員が代わって行った場合が多かった。その場合は、オンラインに掲載された完成版を学習者が閲覧し、フィードバックが得られるようにした。

【引用文献】

ベーカー, M. & サルダーニャ, G. (藤濤文子監訳、伊原紀子・田辺希久子訳) (2013) 『翻訳研究のキーワード』 研究社

Hutchins, W. J., & Somers, H. L. (1992). *An introduction to machine translation*. Academic Press.  
Retrieved from <http://www.hutchinsweb.me.uk/IntroMT-TOC.htm>

マンデイ, J. (鳥飼玖美子監訳) (2009) 『翻訳学入門』 みすず書房

ポエヒハッカー, F. (鳥飼玖美子監訳) (2008) 『通訳学入門』 みすず書房

鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』. ミネルヴァ書房.

Valdez, S., & van Doorslaer, L. (2017). “Retranslating and/or Recontextualizing TS Metalanguage”. Conference Paper. *Retranslation in Context III*. Ghent University, February 2017.